

西鶴抱一句集

西鶴
抱一句集
中原

253
952

087054-000-2

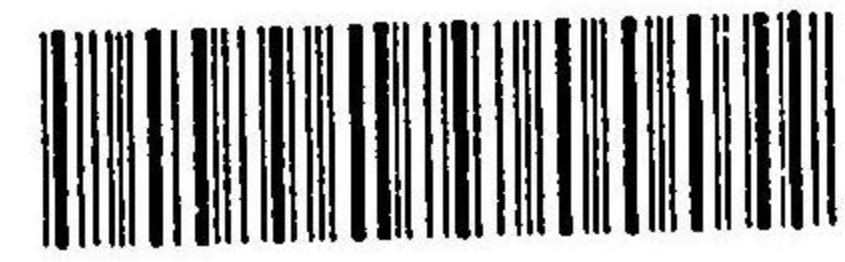
特71-367

西鶴抱一句集

竹の家主人/編

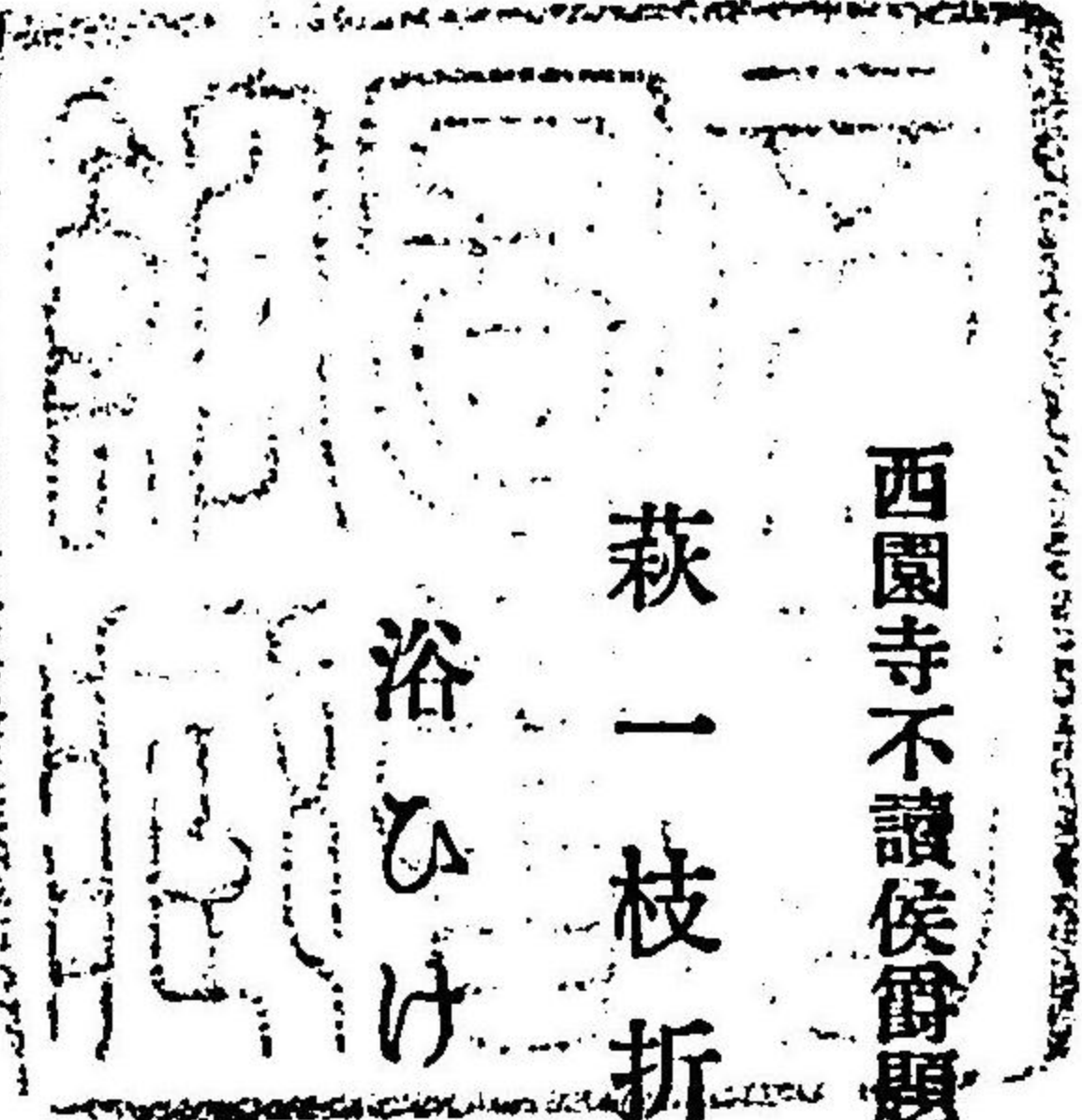
M41

DBE-0221



特71

367



西園寺不讀侯爵題句

萩一枝折りて

浴ひけり花の雨

陶庵



予が、西鶴及び抱一の句集を編せんとせしは、一昨々春の初めに在り。爾來涉獵の同、得るあれば則ち録し、以て此初秋に及び積んで數巻をなすに至れり。乃ち擷華採英して收めて一冊子となす。亦以て江湖同好の一笑を博するを得んか。

申の暮秋

編者 巖

西鶴抱一句集目錄

四鶴俳句集……………一

抱一俳句集……………三五

四鶴連句集……………一三五

西鶴俳句集

春之部

初霞

我戀の松島もさぞ初霞

蓬萊

蓬萊の麓に通ふ鼠かな

竹の家主人編

按摩とり蓬萊宮へ尋行

乗初

乗初の駒こそいさめ鞍づくり

紙鳶

吹貫のあらしも白しいかのぼり

火燧塞

塞ぎぬる火燧のあけも夕詠

霞

古歌のみを喉一筋にひく霞

其くろは目が御座るとて打霞

口添て霞の外に物喰す
春霞おのれいはずばいつまでも

朝霞

觀世座は例をひいたる朝霞
だます事人こそしらぬ朝霞
百日ではとまらぬ別れ朝霞

夕霞

天人も髪を洗ふと夕霞

八重霞

出雲路や縁にひかる、八重霞

どきけり聞て里知る八重霞

長閑

春になる世間の今朝は長閑にて

春雨

春の雨御庭をよごすくらぶ山

佐保姫

佐保姫やはやみるころの前後

梅

香の風やあるじかしこし梅の花

柳

一論議柳はみどりそれきりに

柳の髪

むしの子や柳の髪をすきぬらん

鶯

大谷のうぐひす腰をさすらせて

うぐひすや嵯峨の小家の朝ぼらけ

鮎繪

たまされて一ぱいくうた鮎繪

春空

しく物も喰物もなし春の空

臙

二里行ば月夜に渡る臙川

臙月

入残し西に傾く臙月

雛

雛箱や春知り顔にあけまいもの

曲水

曲水の水のみなかみや鴻農池

花

花が化て醜い人もさかりかな

花をふんていかなる風に羅漢舞

渡りそめ長橋かくる岡の花

花と花嫁入聲入どつさくさ

付さしや花に雫もあらざれば

になはする酒さきだつて跡に花

大喧嘩音羽の里の花に風

一尺五寸死身になりて花の蔭

花は根に土は世界の寶にて

世の中や唯居る能に花の聲

咲花

さく花の都のづてに紋揚枝
さく花の雲起つては隠里
咲花も火ともしていふろくろ首

花盛

枝をれて空手の痛む花盛
乗物まで世間見合す花盛

花の波

花の波伏見の里の下り舟

花見酒

平樽や手なく生るゝ花見酒

花車

花車 轄くわをうつて大軍

花垣

花垣やもつてひらいて年久し

花散る

西門の空静にも花ふりて

櫻

只の時もよし野は夢の櫻哉
なべて世は櫻がさかず下戸ならば
不性こま糸は櫻の枝たれて

不便や櫻とつて押へて板木摺

海苔

水農江やよし野見に行櫻海苔

藤

戀衣猶しほれ行葛籠ふぢ

呼子鳥

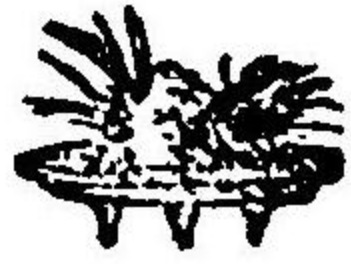
毛が三筋足ないて其が呼子鳥

春暮

律義なる親仁がきかめ春暮て

春雜

黄疽や波にうつりて春の色
花鳥をひとり喰ての暮寂し



夏之部

更衣

長持に春かくれ行く衣がへ

時鳥

輕口にまかせて鳴けよ郭公
夏中の初音もさかじほととぎす
くこめ繩あはれ懸たか時鳥
まつて見て待草臥て時鳥

鳴ますかよくくよとにほととぎす

改の月郭公あたま數

都鳥

濁江に足洗ひけり都鳥

田植

戀人の乳守出來ぬ御田うへ

螢

はらたてな虫と思へば飛螢
夜るでもあれ自然の時は飛螢

蚊屋

賣當の一櫃出來ぬよしのがや

瓜

送らるゝ瓜に添ては合狀

鮪

蛇の鮪も昔をおもふ浪の月

神鳴

波の音水神鳴は落るとも

雲の峰

雲の峰や山みぬ國のひろい物

扇

ひき風や今は扇のかなめ石

舞扇其身をそれに譬たり

戀風はまさる扇屋住吉屋

醫者呼にそふる扇の風のよし

冷風の扇子てんかう置給へ

晒布

紅粉染に今こそかはれさらし布

涎懸色こそ替れさらし布

抱籠

抱籠の目ごとに風のかよひきて

鶉

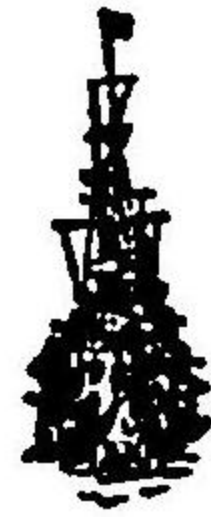
鶉の首をしめ出しに逢ふ戀の間

藜

元政が軒かこふたるあかざかな

佛法僧

松の尾や佛法僧のより所



秋之部

文月

文月や爰元無事にてらすらん

今朝秋

是沙汰を風の吹やうに今朝の秋

來秋

秋來ても色には出でずいもの憂

七夕

女七夕袖行水は嬉し泣

相模

相模取名こそ流れて果にけり

秋風

人參や日ませにさせる秋の風
軒下にたてりとおもへば秋の風
秋の風ふくろくに頭巾させさせて
秋の風薬違ひをせぬやうに

揚灯笼

揚灯笼火宅のかどに暮待て

踊

倅はしれぬ踊のみな白し
てう九十百になりても踊士
大踊爰に舞臺をかけられて

露

袖の露こほし所は野蠟燭

露の玉

露の玉竹鐵砲の響きて
わるかねや古へ今までの露の玉

霧

多門天衆生の霧をはらひのけ

夕霧

しらはりの袖の夕霧見残して

一葉舟

のり浮む妙の一葉の舟路かな

一葉の舟はあぶなき神軍

朝顔

土龍身はあさがほのはかなくて

芭蕉

はせと葉は草紙をつくる女也

萩

對園女辭

伊勢小町は見ね世の歌人今の

世のいせの國より園といへる

女の俳諧をわけて濱萩の糸遠

き浪速の里に志しての我に嬉

しく二見箱祝の海にそめて筆

のうつり行事草をみけるに思

ふまゝにぞうごきぬべし光貞

の妻萱原の捨など花にしほみ

て紅葉がちる世に詠の絶にし
て名をいふ月の秋に此女この
所にしばしの舎りをなし神風
の住よしの春もひさしかれと
ぞことふる侍る

濱 萩 や 當 風 こ も る 女 文 字

散 萩

ちる萩やわらへに花の人形箱

半 月

半月の光影そふ草具足

待 宵

待宵やほどなく明て十五日

今日月

綱は花は見ぬ里もあり今日の月

月

辭 世

浮世の月見過しにけり末二年
宿ちくり二十四時の夜るの月
厚い顔月は出させたまひけり
月の影都の光り善光寺

すみよしの月落かゝるみがき砂
仲人にひすめ自慢や空の月
月の影落て行とものがすまい
三笠山月きよる／＼と氣が違ひ
惜みなれて梢の月や二度びくり
内々の五味を仕舞ふ夜半の月
弓張の月の行方や丹波越
つゝくりて居並繕ふ軒の月
さげおたれ晝は賣物夜は月
七日日や呂水の堤波の月

夕月

夕月は車にのせて得おさぬか

月夜

見た跡を唐人人の月夜かな

有明月

明がたの月かしらには櫛をさし

心月

心の月あかい物ならあかい迄

星

死石や手に持たれたる星の空

玉のがざし星のひかりや磨くらん

秋の夜

秋の夜は枕ならべてよい加減

秋の水

上下・や高宮川の秋の水
引貫や下地一へん秋の水

花芒

花芒とても亂た上からは

瓢箪

先生の瓢箪よりも馬を出せ

雁

此文をそうてなげかう雁の聲
片便宜ながらとどくる雁の聲

鶉

短い世鶉尤にしられたり

渡鳥

暮は風呂ひたき鳥までわたりきて

目白

人たらず目白の鳥も契りにて

河鹿

戀しりよ別ぬさきにかじかなく

秋の霜

秋の霜また白齒にて油断した
秋の霜しろい男はぬらりひよん

紅葉

珊瑚珠の杖かとおもふ下紅葉
ことしも亦梅見て櫻藤紅葉
見渡せば花よ紅葉よおたい櫃

千秋樂

友鶴や千秋樂の常舞臺

秋雜

おしい事童に秋を見せられて
秋淋し寺と宇治との其間
世をわたる業はさまくはんや擽



冬之部

時雨

無理やりに時雨より行戀の道
じりくし若子の寢覺の時雨かな

村時雨

取賣は水を懸たるむら時雨

御取越

鍋のふた時分はよきぞお取こし

紙子

身は紙子四十八枚あはれ也

炭

炭かしらやけば灰とぞ成にける
炭薪もとより烟る磯の松

霜月

今朝見れば霜月切の質の札

綿

緑綿や或は雲のしるしつけ

雪

江戸の様子皆迄おしやるな山は雪
玉綿を繰すと見えて笹の雪
消るおもひ爰ならば爰雪ふりて
踏分てきいずはあるぐ雪の朝
捕者や雪をちらしてゐかいしめ
或日又雪をれ竹は杖となり

雪女

見たるがなくて消ます雪女

河豚

ふぐと汁くふくぢやくく腹心

鷹

鷹の鳥鶉の床にふられきて

寒

いはひ川水も寒行茶堂役

大晦日

大晦日定めなき世のさだめ哉

西鶴俳句集終

抱一俳句集

竹の家主編

春之詠

元日

元日の朝寝起すや小田の鶴

今朝春

よの中は團十郎や今朝の春

庵の春

春興

梅わか菜皆よし／＼や庵の春

花の春

花礫亭の娘はつ鐵漿に

先ふくむかねは櫛はなの春

惠方詣

江を渡て惠方參やうめ柳

初霞

丁巳春興

いく度も清少納言はつがすみ

庭竈

注連ないが餅さしくへの庭竈

鏡餅

いせや伊勢今としも賣らず鏡餅

春駒

桃洞を送る

この道の手綱ゆるすや春の駒

二日

花街

松は皆人に植たる二日かな

萬歳

鎌田の梅見にまかりて

萬歳を居並て待つ田舎かな

鳥追

鳥追の足袋の白さや川向ひ

人日

人の日の粥も雪間のわかかな哉

薺

三味線の名にしをひひる薺

芹

芹摘みに出て孫もるす彦も留主

芹喰ふて翼の軽き小鴨かな

芹賣れてさみしき鷺の栖哉

若菜

見て笑へ若菜の葉に天下筋

春興

若菜ひく女も鶴の歩みかな

君が爲まくり手したり若菜摘

初子の日長浦といふところにて

松真木も引けや若菜のゆて加減

春雪

去年かけた謎は解たり春の雪

霞

榎さへ白壁見へてかすみ哉

庚申春詞

汐擔桶は沖の霞や汲に行

讀把朴子

首延べて霞を呑むか嶺のつる

長閑

辛酉春興

今や俳詣蜂の如くに越り麻の

如くにみだれその糸口を知ら

ず

貞徳も出よ長閑き酉のとし

陽炎

かげるふや野馬の耳の動く度

春雨

梅を縫ふ糸ならなくに春の雨

はるさめやかるとの鬼も綱が手に

はるさめや筏になりぬ竹かへし
皂角に階子わすれて春の雨

正月四日南岳畫師身まかりけ

るよし門人寛柔が書狀とよき
けるに

春雨にうちしめりけり京の昆布
はる雨のふり出す賽や梅二輪
かわら焼く松のにほひや春の雨
詩骨牌に女もひとり春の雨
春雨にほろくあへや御もの棚

春風

松山の花のけむりや春の風

若草

讀王充論衡

若草や鶴の跡たる跡は皆
梅

梅守に硯借れば筆もなし
火もらひに炮の殻や梅の埜
張子屋も梅は咲たり豆達摩

杉田の梅林に遊びて

これはくこ　そや梅のよしの山
難波津の習ひはじめやうめの華
山蔭の梅まだ寒し生大根
をさふしも竹の自在や梅の花
ゆめに見し梅や障子の影ぼろし
全處になき箸番賣りや梅の紋
をさがりの平含むや梅若し
うめが香や爰の巨燧も周防どの
松を畫に昏行梅や金砂子

去月十七日杉田にあそびて

解き舟の橋を境やうめの華
ゆきみそれつもりくゝて梅花
鳥さしが手際見せけり梅花
鳥追の昔し模様やうめに鳥
落る音ちとすちとあり園の梅
胡麻節を軒端の梅のつぼみ哉
うぐひすの遅音笑ふや垣の梅

柳

筑山の戸奈瀬におつるやなぎかな
から傘の骨のたくみもやなぎかな

鹽釜のあたりに煙るやなぎ哉
から傘に柳を分る庵かな

青柳

青柳やいなりの額の女文字

鶯

うぐひすの舌うちしたり花の味
うぐひすは鳴くともかたし腰瓦

十鳥千句獨吟卷頭

うぐひすに北野の繪馬かゝりけり
うぐひすや今谷を出て身づくろひ

讃戯書

鶯の身をさかさまに初音どん

春興

うぐひすの口明く影や下地窓
うぐひすや梅に氷れる枝もなし
鶯は舍那王どのやうめの肘

文化丁卯春當流の宗義、積年

の惑亂、悉く御裁断ありて、

二月十八日築地御坊に召れ關

東三十三ヶ國の御末寺、各御

教授あり、本如上人の御徳義、

四海にあふれ、誠に鳥驚ぬと

いへるも今此時なり。

うぐひすに御堂の鼓しづかなり

戊午春興

うぐひすや雲水の井を水かきみ

うぐひすは梅にやどかる鳥は皆

鶯笛

丙辰春詞

竹藪にうぐひす笛も生れけり

蛤

貝の斑の雀に似たり夜蛤

海苔

干海苔に小海老見付て哀なり

白魚

文臺の銘

しら魚や是も居杭の橋柱

蛸

金澤の汐干に

経緯の潮や蛸の縞ごのみ

二日炙

鶴の来て豆煮おとこや二日炙

出代

出代の唇にあつき椿かな

初午

はつ午やしるし斗を揚豆腐

初午や二ツ瓶子の黒羽あり

初午や大に嗅れる此趣向

畠打

鳥うちをよくも反るなり老が身を

雉子

とふ迄を走つけたる春雉哉

むし鱧

うら白は春のものなりむし鱧

春日

却走馬以糞

はるの日や墨繪の馬の幾かへり

卯春興

鴨のりて氷ながるゝ春日かな

暮遅

平の實の四もたらてや暮遅し
臙月

ありと言ふ二玉の筆やあぼる月
紅梅

紅梅や今朝はまだ來ぬ白すゞめ
初櫻

人の氣のほころび初めつはつ櫻
菜花

菜の花や簇落たる道の幅
蝶

花に飽て机にねむる胡蝶かな
夜べ捨し玉子の殻や飛胡蝶
蝶々や獅々のねじりの上を飛
囀の圃に暫く花も舞ふ胡蝶
から猫や蝶噛む時の獅子奮迅

初燕
初燕くるふよふなり袖袂

乙鳥

乙鳥や汲てはなせし桔槔
乙鳥の棚うちつけよ花のやど

皆くゞる燕雀や鶴の股
蜂

讀仙經

朝々の洗ひながしや蜂になれ
蛙

田から田に降ゆく雨の蛙哉
鳴かぬ田もなく田も動く蛙哉
雛

雛よりもかしづく人のひるなかな
曲水

上巳

傾城やまづ曲水の椽に腰

沙干

沙干狩比目の裏に歌書ん
花

花ひと木鞍置く馬を蔽しけり
ちり積て山樵が荷や花一朶

漢土楊子江 日本隅田川

茶の水に花の影くめ渡し守
鶯の花汲ひに来る夜明かな

錢突て花に別るゝ出茶屋かな
花見ても依估ある人のこゝろ哉
會式

佛力やまだ見ぬ花のよし野紙
花菫

囁れや魔佛一如の花むしろ
花の雨

起よ今朝上野の四ぞ花の雨
春眠

たらぬ夜に日を足す日有花の雨

花の雪

多田薬師法樂

是は目の薬になるか花の雪
櫻

花びらの山を動すさくらかな
深山木を几帳にのぞく櫻哉
糸櫻

鳥一ツ梭を投たりいとざくら
墨子悲絲

そめやすき人の心やいとざくら

山櫻

衆徒よ兒木葉天狗よ山ざくら

朝櫻

錢賣の覗て行くや朝ざくら

すみだがはの花見にゆきて

遅りやいかに張良朝ざくら

夕櫻

人影や月になりゆく夕櫻

かね撞ぬ撞樓有けり夕ざくら

夜櫻

傾廓

夜ざくらや箱提灯の鼻の穴

花散る

瑞龍寺をよぎる

ゆきとのみいろはに櫻ちりぬるを

元木の彌陀に詣るとて

仰影供の團子も花も降る日かな

遠望

散る花を汲とも見へつ茵柄杓

人麿忌

ちる花やあまぎる雪の鍋鑄かけ

桃

牛ほどの蟻見付たり桃のゑだ

上己

居候夜着の洞出て桃の花

椿

鶴の子の額は赤き椿かな

連翹

連翹の苔喰ふかわら鴉

山吹

山吹や卯の花をそぎ垣根より

欸冬の水なふりする夕かな

欸冬や水のけふりも此ごろは

藤

往昔のお腰かけ石藤のはな

藤波

朝妻ぶねの賛

藤なみや紫さめぬ昔筆

呼子鳥

悼米翁老君

聰き人も耳なし山や呼子鳥
新蕎麥のかけ札早し呼子鳥

櫻貝

榎島參詣

さくら貝手ごとに拵へ島同者

春雜

李笠翁にならひて

一幅の春掛ものやまどの富士
日よりして春の歩行や日の鴉

遊べ春梅の鼻毛の延次第

米翁老君の三周

高宗が三年ははやし桃李
今朝解くや氷の若菜霜の梅
藤房と正成と花ひとへな

行春

行春の袋比目や餅かつを
ゆく春を小鹽の曲せく一ト奏

三月盡

帯木の袷尋る晦日かな

夏之部

卯月

悼嘉魚

膝抱いて誰も五月の空ながめ

更衣

脱かへて花見虱に別れけり

なま鯛や先綿をぬけ更衣

拾

八が廓人形も拾かな

佛生會

生れ出てうき世の花の一御堂

麥

八尊に明るき麥の田一枚

一二丁先をゆく帆や麥の浪

牡丹

飛ぶ蝶を喰んとしたる牡丹かな

牡丹一輪青竹の筒にさして送

られける時

仲光の討て参しぼたんなかな

罌粟

維摩經をよみて

解脱して魔界崩るゝ芥子の花

若葉

案内子が小便したるわかばかな

庭若葉

樹作りが衣かゝれり庭若葉

櫻の實

無同剃髪しけるとさ

よし野よく櫻ん坊の天窓かな

筍

木髪の湖十と名改まる

筍やこの百姓や六代目

卯の花

うの花や楨の柱のわれにさせ

葵

さきのぼる葵の花や段階子

千團子

うつの谷にて

あとからも旅僧は來り千闍子

時鳥

爐に寄ればよらるゝ夜なり杜宇
苗賣りに初音問はゞやほとゝぎす

古筆了意が宅にて岩倉三位の

不二見んとて忍びて東下せし
に會して

岩倉のしのび音もれの時鳥
ほとゝぎす鳴やうす雲濃紫
山樵がされ口にくしほとゝぎす

今一聲答る山やほとゝぎす

空懸明月待君主

今上る客は化物ほとゝぎす

舟行

ながれゆく樵木屋舗ほとゝぎす
ほろ蟬の山かげ忍べほとゝぎす
ほとゝぎす手燭にくらき夜の空
聞そめてなかぬ夜ゆかし鶉
鶯の子は宗盛かほとゝぎす
近村の森のあたりやほとゝぎす

ほととぎす猪牙の布團の朝しぬり

權川坂と言ふ所にて

ほととぎす楓花咲く山路かな
ほととぎすいたき枕に寝たよ哉
待ぬ蚊の寺の高さやほととぎす
ほととぎすたゞ有明のかじみたて
晝中に入梅のしるしや時鳥

葭割

葭割や燈火もるゝ夜の川

水鶏

たゝかずに水鶏の入るや戸なし庵
やよ水鶏さいたる門を敲とは

老驥伏櫪而志在千里

烈士暮年而壯心不止

唾壺も四ツ迄たゝく水鶏かな

笠

もれ出る籠のほたるや夜這星

笠狩

秋既にちかづきふへて笠がり

蠅虎

鼠とる猫鳥捕る鷹みなこれ世

上のありさまなり

草の戸に蠅虎をながめけり

柏餅

鴛の栖む其木末とは柏餅

幟

板引のこれも久しきのぼり説

初幟を祝ひて

糖を餌に釣上たりな吹ながし

竹酔日

ゑひさめて竹もる月や十三夜

五月雨

五月雨やいつ見しまゝの淡路島

たけかはもうつ蟬も恭や五月雨

匡衡が壁をのづから五月あめ

紫陽花

紫陽花や硝子吹きが椽の先

か 江戸節の一曲をきいて

紫陽花や田の字づくしの濡ゆかた

石菖

達摩の賛

石苔や尻も腐らず石のうへ

山梔子

山梔子の花の相手や世捨いほ

藜

巨園八十賀に

突ふるせ神の切けん此藜

若竹

わか竹の弓にうたるゝそだち哉

栗の花

ほととぎすこれを喰ふか栗の花

松葉牡丹

畫賛狗句、彦根侍の真似して

さして見る松葉牡丹のから傘ダ

瓜

守る人に枕かそふよ瓜はたけ

蟬

山寒し瀧より下の蟬の聲

火串

夏山の火串は悵の紙燭かな

蠶玉

蠶玉を祭すてたる貧家かな

暑

物申すに返事のをそき暑哉
鉞に氷を碎くあつさかな
薬賣が黒き扇の暑かな
とび移る蟬の羽赤さあつさかな

汗

車ほど舟押す人や汗干がた

夕立

ゆふ立の今降るかたや驚一羽
夕立や静に歩行筏さし

雲の峰

水になる自剃盥や雲のみね

緑樹影沈ては

仙薬を魚もなめてや雲の峰
翌も又こゆる暑さや雲の峰

扇

己巳四月江の島辨才天三社惣

開帳ありける時

扇にて扉ひらくや狂言師
聞暑し舟にもうごくあふぎ哉
居眠をりつばにさする扇かな

團扇

住吉をどりの書の讀に

ふけや此すみよしの風さちはより

涼し

圓覺寺にまかりて

鐘涼し女の力聞へけり
すとしさは家隆の歌のしるしなり

納涼

井の水の浅さふかさや門すゝみ

涼舟

遊百花潭之水樓

折琴よ繼三味線よすゝみ舟

涼臺

湯泉に立て人の噂や涼臺

心太

一樹の蔭他生の縁ぞ心太

茗荷筭

泰室改春來

島臺の鶴と成けり茗荷の子
蓮

解具判者披露

隠家は同じはちすの垣根かな

夏祭

船頭も象となりけり夏まつり

夏袂

すげ笠の紐ゆふぐれや夏袂

御袂

としぐや御袂に捨てる多葉粉入
御袂して各々包むはかまかな



秋之

今朝秋

羽をためす乙鳥高し今朝の秋

初秋

はつ秋や心に高し空の鳶
はつ秋や寝覺て笛の指遣ひ
はつ秋や夏を見かへる和田峠

鏘々録々金鐵皆鳴

はつ秋や嗽茶碗にかねの音

七夕

七夕の硯に遣ふ楊枝かな
かさゝぎとけふは呼ばるゝ鶉かな

星迎

かさゝぎの橋場を渡れ星迎

待星

晝寝して晩待星を顔に筥

星の竹

笛のはし子呼なり星の竹

途ふやいかに夜のにしきの星の竹
袖ふるは廓の屋根や星の竹

星宵

牛牽て川越す人や星の宵

乞巧奠

率く牛のはなの穴もつ星ニツ

銀河

素麵にわたせる箸や銀河

地にあらず二股大根天の川

燈籠

傾廓

燈籠も鵜の背と代りけり

花火

星一ツ残して落る花火かな

角力

海山と名の立分る角力かな

初稻妻

水田返す初いなづまや鉄の先

稻妻

いなづまやしはし明るき椎が本

いなづまや夜と晝との田一枚

宇治の里一見の時

いな妻や二度にみせたる寺と橋
黒樂の茶碗の缺やいなびかり

秋風

伐木丁々

山更にひゝ切る音や秋の風

夕露

夕露や小萩がもとのすゞり笛

朝顔

手つゞみや朝顔の葉を以てなる
朝がほや花の底なる蟻ひとつ

女郎花

野路や空月の中なるをみなべし

青樓草市

市分てもものいふ花やをみなべし

蜀黍

蜀黍やさしも隠せし圃の中

花野

魚一ッ花野の中の水溜り

虫撰み

堀川院の御時よりとぞ

虫撰聲なきは皆うつくしき
きりはたり提燈持も虫撰み

蓑虫

みの虫や啼ねばさびし鳴くも又

馬追虫

此土手の馬追ひ蟲や船かふね

待宵

待宵や降出す庭の捨箒

名月

明月や曇ながらも無提灯
名月やもと鹽竈の人通り

榎原辨才天法樂

名月に松明もたのまぬ岩窟かな
名月や入聲の鶏の咽のうち
名月や洋に見なれぬ獸あり

紫式部の畫に賛に

明月や硯のうみも外ならず
名月に御歌所も覗きたし

名月や筆法居士が霧の不二

良夜

名月や何に似たるぞ鍋の蓋

今日月

寝やといふ禿まだねずけふの月

花方に團子喰せつ今日のつき

月見

吾蒔る菊に讃なし片月見

雨の月

良夜飄風雨

待寝して雨夜の月は夢にみむ

十六宵

十六宵や去年の日記も雨の事

葉月十五夜寒光洞てに

十六宵も獅子の氣遣りか卯の月

月

月の晝うき寝の鳥をかぞへみむ

雲の飛とぎれは月のみなと哉

薩埵峠にて

夜山越す駕の勢や月と不二

雲の月見しやそれとも有馬筆

月の秋

上臈のひとり歩行や月の秋

秋の月

馬市の借屋に一と夜秋の月

野分

かひ巻もとられし音の野分がな
みの笠も草を遁ぬ野分哉
野分立つ空やからすの弱法師
屑買ひの吹れて歩行野分かな

秋雲

みねとなり渚と成るや秋の雲

秋雨

狸の腹鼓の書に

うち落せ秋の夜雨のふる瓦
樹の丈に姿見へけり秋の雨
秋雨や筏の床の夕けぶり
秋雨やそれは降る鳩晴る鳩
炮焙に何ふすふへそ秋の雨

秋聲

蚊の嘴にさゝらと言と初けり

捨團扇

先一葉秋に捨たるうちは哉

礎

旅人にかしてうたするきぬた哉

萩

臺笠も立傘もあり作り萩

笠脱てみな持せけり萩もどり

薄

趁浪を追かけて刈るすゝき哉

中秋無月

物干の薄に雨を聞く夜かな

初茸

はつ茸や苔斗りの小むらさき

初茸や廻さば獨樂にまはるべく

降り年や初茸賣りが聲の銷

新蕎麥

新蕎麥や一とふね秋の湊入り

掛稻

かけ稻を屏風に眠る小鷺哉

初雁

はつ雁やはつかの間・に聲は月

雁

今下す雁は小梅か柳じま
先ひと筆しりしや雁のふみ
刈除けて雁待つ小田の景色哉
田の畔に居眠る雁や旅づかれ
ふる鷺の恐かりの聲
ら戻る雁の行

鶴鶴や芥は見へず水のうへ

鴟

百舌のなく木末は昏て十三夜
百舌鳥の尾のふる里寒し稻ほつち

鶉

いきたなき隣も有を飼うづら

鴨

鴨立澤にて

三千風に見付られたり澤の鴨

鶉

晩器改名朝四

いろ鳥の中によき名を輯設

啄木鳥

啄木鳥みねのあらしや谷の聲

沙魚

沙魚釣りや蒼海原の田うへ笠

鳥瓜

つる引けば遙に遠しからす瓜

印籠の一ツ下るやかからす瓜

茱萸袋

生銷や納屋の柱の茱萸袋

菊

重陽

太刀懸に菊一とふりやけふの床
見劣りし人のこゝろや作りさく

歸去來

歸なむ店酒一とに菊寂ぬ
さくの宿基經見て居る主かな

白菊

しらぎくや籬のうちの羽林軍

今日菊

昔みし御花小判やけふのきく

溪の菊

露吸て蟲も千代經人溪の菊

十三夜

雁も田に居馴染む頃や十三夜

妹許の櫻煙草や十三夜

熱烟をふくや後の月の松

紅葉

沓音にくれたのもしき紅葉かな

霜葉紅於二月花

もみぢ折る人や車の酔さまし

駒宮如岡を悼て

露霜に手を合たる紅葉哉

又もみぢ赤き木間の宮居かな

昏る日を荷ひ戻せよ紅葉賣

山紅葉照るや二玉の口の中

紅葉見

東陽山

紅葉見やこの頃人もふところ手

櫻紅葉

一葉二葉櫻紅葉も残る月

榎紅葉

問ひ來りし榎の紅葉地藏堂

龍膽

龍膽や慈鎮の菊の後にさく

柿

柿畠やけろりと二本休みどし

神田明神祭禮

柿賣の逃行かたや猿のだし

胡蘆柿

龜田(鵬齋)先生とは予も斷琴

の中なれども樂みは酒餅の遠

なりければ

ころ柿にわれも立ばや茶一盃

鹿

啼く山の姿も見へつ夜の鹿

秋にはたへぬと良經公の御う

たにも

月の鹿ともしの弓や遁來て

秋雜

七里濱にて

浪に立つ人も馬鹿鳥磯の秋
護田鳥の鳴く木屋が置場や宵の月

芥川わたるところ繪たるに

抱かれたり負たり風の萩すゝさ

秋の暮

あゝ欠び唐土迄も秋の暮

九月盡

舟猿の舳先にさみし九月盡



燕の残りて一羽九月盡

冬之部

時雨

畫贊

晴れてまたしぐるゝ音や軒の松
うね火山耳なしやまや二た時雨
木樨の照葉見つけし時雨哉
客船に入日残して時雨かな
傘はまだ時雨るゝ音や星月夜

河人が初七日に橋場の保元寺
に参りて

松を時雨むかしうき世の鞠目附
いつ月になりて時雨は松の聲
見し夢や時雨の松の畫から紙

箕輪石川侯口切出し給ふとき

きて

軒にけふはこひ手前の時雨哉
から傘を返せいもとの時雨哉

少年行

飛ぶ鶴や時雨來る夜の膝頭

吉田高麗の茶盃を畫にうつし

其上に讀しておくとて

幾時雨ふるやふる田のかたみ哉

達摩忌

畫贊

達摩忌や朴の落葉の杏片し

初霜

初霜や鹽焼く浦の藁の屑

今朝霜

今朝霜

湯豆腐のあはたゞしさの今朝の霜

霜の舟

十日の夜小舟にとりのり清水

の港をこへ三穗の明神を遙拜

して絶景言葉につくされず

いつ迄も夢は覺るな霜の舟

霜の聲

朱雀野に日くれて

島原のさはらくや霜の聲

霜

佐谷川にて

水鳥は流るゝ沓や橋の霜

冬の川

獺毘の崩れ次第や冬の川

鴨のひと足ぬきや冬の川

冬田

江戸書圖の冬田や鶴の一跨

冬の海

しぐるゝは鶯の羽影や冬の海

口切

一年好景君須記

口切や南天あかし梅しろし

木枯

こがらしや明は木の控園の竹

炭

水却て炭を斗るやかたし貝

火鉢

先むすべ冬の出湯のわく火鉢

火桶

俊成卿の書

おもふ事言はてたゞにや桐火桶

炬燵

書讀

仙人の碁盤に向ふ炬燵かな

置炬燵

江尻の驛寺尾與右衛門が許に

て

置炬燵浪の關もり寝て語れ

光厳卿の倭歌によりてなり

布團

木屋町にて

布團着て寝て見る山や東山
のり初る五ッ布團やたから船

袖頭巾

さぬくのふくら雀や袖頭巾

落葉

落葉して都の見ゆる庵かな

東叡山の清水

如意輪の頬杖したる落葉かな

からくと日本堤の落葉かな

散紅葉

山川のいわなやまめや散もみぢ

山茶花

山茶花や根岸尋る革文管

石蓐花

石蓐の日蔭は寒し猫の鼻

枯野

鷹犬の繩に引る、枯野かな

冬枯

御關所

冬枯や朴の廣葉を關手形

冬野

冬の野や何を尾花の袖みやげ

冬木立

鵬の枝踏む音や冬木立

遠山に赤き宮あり冬木立

水鳥

水鳥や行あたりては右左

千鳥

來ぬ夜鳴く所や虎が裾模様

存義先師十七回忌

ふるごとを鳴て千鳥の礎めぐり

小夜衛

小夜千鳥まだ寝ぬ船の咄聲

伊豆衛

門覺上人の院宣を持來たる處

書たるに

伊豆千鳥その足あとを力かな

鶴

時頼の寝酒を笑へみそさゝる

木兎

箱根温泉本福住九藏がもとに

とまりて

木兎も來社の神の頭巾かな

木兎曳きや初笑ひし輩は

鷹

蒼鷹の拳はなれて江戸の色

髪置

かみ置や男の肩にこぼれ梅

鉢叩

水無月なれば鉢叩百之亟得道

して空阿彌と改吾婦に下ける

に發句遣しける

其夜降る山の雪見よ鉢たゞき
粥一ツそふや不喰の鉢たゞき

後

水鳥の脊中を走る霞かな
降霞玉まく葛の枯葉かな

雪

雪折の雀ありけり園の竹

書の賛に

かた足はちろり下げたか雪の鷺
雪の夜や雪車に引せじ三布圍

六の花見

戸奈瀬の雪を

山の名はあらしに六の花見哉

氷

草の戸や小田の氷のわるゝ音

鮫鱗

其以前鮫鱧くひし人の體

河豚

河豚喰た日はふぐくうた心かな

鹽鯉

沾徳か手紙とどくや鹽かつほ

冬の魚

和田海の底もにしきや冬さかな

師走

麓にも手を組む松や師走山

臘八

臘八や隠者は山に入るも有り

寒菊

寒菊の葉や山川の魚の鱗

節季候

節季候は百轉のはじめかな

餅搗

もちつきの駒のかしらや杵の先

餅花

餅花や柳さくらを一木にて

餅花や昔ながらの筥階子

探梅

藪蔭のうめを探るや稻光

春待

清水寺に参りて

春待や柳も瀧も御手の糸

年木樵

鷹の栖む山は霞むかとし木樵

年暮

植木屋が歳暮の梅のにほいかな

一文の日行千里やとしのくれ

ちよと鳴けとしくれ竹の庭雀
大名は鸚鵡に似たりとしのくれ

己巳の冬居を藤塚といふとこ

ろにうつして

取遣りもをかしき村の歳暮かな
繪馬かさやくれゆくとしの走り筆

正月近

鹽魚に正月ちかさ日ざしかな

大晦日

傾廓

君平が占もあたらず大晦日
葦雲樓にて

傾城のふくささばさや大晦日
年關

百兩と書たり年の關手形
告わたる木綿付駕や年の關
行年

ゆくとしを鶴の歩みや佐谷廻り
八橋やながるゝとしの疊臺
行年や株にかゝる金もがな

年夜

としの夜や庭火に白き犬の顔
年取

いぶ珠を拾はんとしの浦傳ひ
年越

青樓

此年も狐舞せて越えにけり



雜之部

師遠が答をひくやけふの松
ふるどしのふる名は呼ぬ鈴葉哉

三冬雪なし陸月十七日雪ふる

刈らでけふ雪待つけぬ庭の萩

甲子の大黒天を畫て

月花もいざうち出さん小槌より

花未開

笑はせて笑ぬ花や車僧

草色遙看近却無

何草と見へずに青く野は成ぬ

卯月八日に

珍敷ひものが咲ます垣根かな

琴流君の一周に當結ふ

川風の行て歸らぬ網火かな

九臯のもとより初鯉送りけれ

ば

魚の背に鎌倉山の青みかな

魚狗や笹をしもれて水のうへ

出山寺に晋子の發句碑たつと

て

草莖の今に残るや人の口

東陽精舎にまかりて

地に敷や佛の場の天竺花

山陵の吸筒さかす夕かな

妙見の觀世音參

あとになる潮のおとなり松の風

淺草の富士詣

これよりして御馬返しや羽織不二

朝三いつのとしか予と京都に

遊ぶことし又心牛にいざなは

れて花洛にをもむくその餞し

て

當て來よ大和路かけて二の替り

饒湯も淺香の沼の六日かな

橘千陰身まかりける斷琴の友

ないければ

から錦やまとも見ぬ鳥の跡

蔓ものも包ぬ草のいほりかな

永代橋のもとに銀鱧をあぐる

とき

さし覗く顔も鷗や五兵衛船

未白が一周忌に

ひとめぐり廻りて居るたかへ哉

水貝の鉢に小鳥やまつ鳥や

悼無同

初七日鼻くそ餅も間にあはず

車井の音や雲井の渡り鶴

藤澤にて

人知らでうけらの花の盛りかな

豆箕の中這て居る弟かな

鯛の名もとし白河の旅寝かな

さぬくの橋になつたかあの鴉

七夕

空にニツほしきものあり機道具

寛政九年丁巳十月十八日本願

寺文如上人御参向ありしをり

から御弟子となり頭剃りこぼ

ちて

遷るべき山ありの實の天窓かな
おし鳥のふすまの下や大紅蓮
枯葉ゆく葱の小川や牛の繪馬

歳暮

市人の天狗礫や土のかね

望白長津

市人の喧嘩やとしの川向ひ

歳暮

我がどに松負背せ馬やとし儲

としの菊うち拂ふ初のほこり哉
竹取の翁の煤や太郎冠者

西鶴連句集

竹の家主人編

伏見の里に日高に着き、下り
舟待ついとまありければ、西
岸寺のもとへ尋ねけるに、折
ふし淀の人所望にて、任口
鳴ますかよくくよとにほとしぎす
めづらしき句を聞、我もあ

さつに此句を言捨、其よもす
がらひとりねられぬまゝに書
つゞけ行に、あかつきの鐘入

軒屋の庭鳥に驚き侍る。

輕口にまかせて鳴けよほととぎす
瓢箪あぐる卯の花見酒
水心しらなみよする岸に来て
こぎ行く舟に下手の大づれ
橋かゝり今をはじめの旅衣
虹立そらの日和一段

文月や爰元無事にてらすらん
さんかあたまに盆前の露
懸乞も分別盛の秋更て
こらへ袋に入相のかね
かひなつく命のうちのしかみかね
前髪はゆめさよの中山
菊川の鍛治が烟と弟子は成り
仕させの羽織のこる松風
今朝見れば霜月切の質の札
道場に置く二十八算

智恵の輪や四條通にぬけぬらん
竹の園生の山がらの籠
わこさまは人間のたね月澄て
とりあげばともくれて行秋
見渡せば花よ紅葉よちたい櫃
浦のとまやのさらせ態也

江戸大阪通馬

奥山のこはい咄をさがし出す梅朝
鼓を懐てしめころさるゝ西鶴
神鳴のふんどし解いて床に入朝
鬼の起請も是非こゝでかけ鶴
法の雨一味同心する上は朝
観音薬師寺次郎左衛門鶴
のぞむ所天竺牢人有付て朝
孔雀の汁に米の秋風鶴
引て雲二番目に出す岑の月朝

商上手袖の稻づま鶴
まつ煙草打火の光花飛て朝
隠居は毛貫若世は櫻鶴

振舞んあたゝのはづれ比叡の雪團水
情にあたる小野の炭西池が別號なり窟西鵬
春になる世間の今朝は閑にて同

膳すへならふ窓の梅か香團
二里行は月夜に渡る隴川鵬
火影に青き人の貌ばせ團
なげきても経帷子にきはまりて鵬
うき世の外をかたるよしはら團
たまくらの夕女に女客鵬
一度くにかはるいり物團
なまぐさき小家がちなる須磨明石鵬
月に見とれて居る人は誰團
俤はしれぬ踊のみな白し鵬

くるゝ垣根によわる森園
老ぬればつるべの繩をたぐり捨鵬
呼にやるまの遅き鉞立團
花鳥をひとり喰ての暮寂し鵬
障子あくればつばなたんばゝ團

花にくむやもとより爰は上々吉西吟
櫻のにほふ山おろしあり西鶴
鐵の谷は藥研の雪消て西友
この脛のねは鶯の聲西花
見世の先は朝毎には來れども西六
お歸りやつたらかういふてたも吟
内々の五吟を仕舞ふ夜半の月鶴
人は我でもつ山の端の色友

江戸の様子皆迄おしやるな山は雪西鶴
時雨先だつ六日目の朝梅朝
薬取軒端に松の風過て同
頃は若葉の藤之介母鶴
改の月郭公あたま數同
猫にひかれて跡の浮雲朝

とやさけりさいて里知る八重霞西鶴
日千句の座を鳥歸る山友雪
花盛見まひ杉折ひらかせて同
のまぬ人には餅躑躅さく鶴
雇はれてこちらへ直ち岩根道同
下り坂には荷とるやぢ馬雪
月影やもそつと右へまりたまへ同
紅葉をうつす膳か出ますか鶴

近刊豫告

▲自修自養の人

▲小前田利稚

▲心の現象

▲佛教初學問答

▲情慾論

明治四十一年十二月八日印刷
明治四十一年十二月十一日發行

正價金貳拾五錢

東京府北豊島郡高田三百四十四番地

發行兼編纂者

姫河原良海

印刷者

田口長次郎

印刷所

東京市麴町區飯田町五丁目十番地

印刷所

豊文館

電話番町二〇六九番

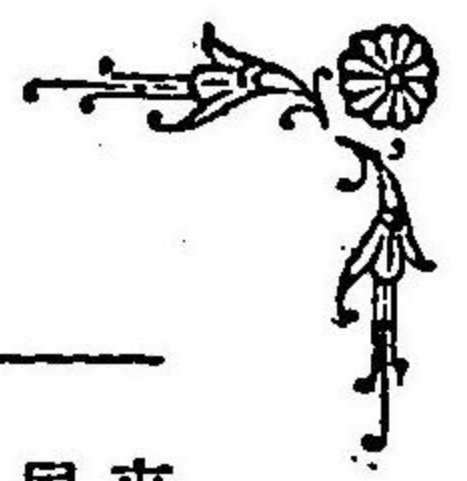
不許複製

發行所 東京府北豊島郡高田村高田三百四十四番地 文藝之日本社
發行所 東京市牛込區早稻田麴卷町四十三番地 三友堂書店

振替口座一四二五五

253
952

大 賣 捌



同大 同同 同同 同同 同同 同同 同同 同同 同同 同同 東
阪 京

吉三 至修 東二 文杉 林北 武上 三東
岡宅 誠學 亞松 林 隆藏 田省 京
平壯

助藏 堂堂 堂堂 堂本 平館 屋屋 堂堂

千札 松長 廣長 同熊 久同 名同 大
葉幌 本野 島岡 本米 屋 阪

多宮 高西 積目 長吉 菊星 川松 積
美澤 善黑 崎田 竹 瀨村
田貴 喜館 十次 幸書 代九 文
書太 支

屋堂 店耶 店耶 耶衛 店野 助衛 社



